研究論文

日本におけるイスラームの歴史からみる日本人の宗教性（スピリチュアリティ）について

Japanese Spirituality Seen from the History of Islam in Japan

小　村　明　子
KOMURA Akiko

Key words: 日本人の宗教性、イスラーム、日本人ムスリム、異文化理解
Japanese Spirituality, Islam, Japanese Muslims, International Cultural Understanding

Abstract

This paper attempts to shed light on Japanese spirituality from the point of view of Islam. Japan made its first contact with Islam in 1890, when a Turkish warship sank off the coast of Wakayama, and this incident led to the birth of the first Japanese Muslim. Despite the many years that have passed between then and now, Japanese Muslims number only about 10,000 today. Why are they so few? The fundamental reason may lie in the very differences between Islamic spirituality and Japanese spirituality. Islam is a religion of faith with Allah as the only absolute god and has strict duties to fulfil: the Six Articles of Faith (六信) and Five Pillars of Life (五行). Meanwhile, most Japanese believe in Shintoism or Buddhism. However, they go to a Shinto shrine or Buddhist temple to make a wish, have a wedding at a Christian church, and have a funeral at a Buddhist temple. This puzzling behaviour explains the basic characteristics of Japanese spirituality, that is, (1)unconscious involvement in religion, (2)having more than one religious belief, (3)a mixture of the sacred and secular, and (4)interest in practical benefits and healing. It is thus difficult for Japanese to accept Islam as an alternative way of life. Once there was an attempt made to create the “Japanese-style Islam”. However, it failed because Islam is a religion of eternal truth with no room for change.

1．はじめに

本論の目的は、多神教でありシャーマニズム的要素の強い日本の宗教とは対照的な性質を持つイスラームという宗教から、日本人の宗教性について考察することである。

本論文では、はじめに、イスラームという宗教とそのイメージについて触れる。次に日本におけるイスラームの歴史について、 日本とイスラームとの関係の視点から論じていきたいと思う。またその歴史において、日本人がイスラームを理解しやすくするために考えられた「日本的イスラーム」について論じていく。最後に、以上の事実に基づいて、イスラーム及び日本社会のイスラーム受容の視点から、日本人の宗教性について考察していきたいと思う。

2．「イスラーム」という宗教とそのイメージについて

イスラームは 7 世紀に、アラビア半島の都市メッカに興った宗教である。610 年頃に神から天使を通じて預言を受けた預言者ムハンマド（570 年頃～ 632 年）によって広まり、その後の正統カリフ時代（632 年～ 661 年）の間に、中東地域に拡大していった古くから存在する宗教である。

現在、イスラームはキリスト教に次ぐ世界第二の宗教である。だが、多くの日本人にとってイスラームはいまだ遠い存在である。その理由はいくつかある。まず、歴史的にイスラームと日本との邂逅した時期が明治期からであるにもかかわらず、多くの日本人たちは現在においても身近にムスリムの存在を認識していない。また一方で、マスコミのニュース報道から、イスラームに関して「テロ」や「戦争」といった悪いイメージを植え付けられていることも多くの日本人からイスラームを遠ざけている一因である。さらには日本人が理解し難く、かつ嫌厭することでもあるのだが、イスラームには信徒が信じるべきものや信徒としての言動に対する明確な規定があるからである。

イスラームにおいてその教義の根幹となる、信徒が信じるべきものは「六信」と呼ばれる。イスラームの神は唯一神アッラーのみであること、天使（マラーイカ）の存在を信じること、預言者（ラスール）、啓典（クトゥブ）、来世（アーヒラ）、定命（カダル）をそれぞれ信じることである。なお、預言者は「神」ではなく、「神の言葉を預かる者」を指す。イスラームの預言者といえば、「ムハンマド」だけだと思われがちだが、ユダヤ教の開祖であるモーゼや、イエス・キリストもまた、イスラームにおいては預言者に数える。

また、信徒への義務として課せられている「五行」がある。イスラームに入信する際に 2 人以上の男性信徒がいる前で行う信仰告白（シャハーダ）、 一日 5 回決まった時間内に行う礼拝（サラー）、貧しいものへの施しを与えることを意味する喜捨（ザカート）、とりわけラマダーン月（イスラーム暦の 9 月）に行うのが有名である断食（サウム）、 一生に一度は行うことが義務付けられているメッカへの巡礼（ハッジ）がある。なお、サウムはラマダーン月以外にも、シャウワール月（イスラーム暦の 10 月）やムハッラム月（イスラーム暦の 1 月）の 9 日及び 10 日にも行わ

れる。

六信五行はイスラームの信仰の基軸である。言い換えれば、ムスリムたちの日常生活や人生における原理・原則となる。従って、ムスリムはどの地域においてもどの時代においてもこのイスラームの基本原則を変えることはない[1)]。このような日常生活における規定は、 多くの日本人にとって息苦しいものに感じられるかもしれない。

だが、イスラームが創始されてから数百年もたてばイスラーム圏においても社会状況が変わる。またグローバル化により、これまでイスラーム圏でなかった地域にムスリムが移住したり、あるいはそこで非ムスリムがイスラームと接触する状況が生まれる。こうした世界状況の変化に応じて、さらなる時代や地域性に対応したイスラームの教義の解釈が必要となってきた。イスラーム法学者たちが、信徒たちからの質問や社会問題となっている事柄に対してクルアーンやハディースの解釈を議論し、その見解の結果を「ファトワー」として信徒たちに向けて伝えることにより、イスラームの教義の実践における指針を示している。

こうした世界宗教であるイスラームを一般の日本人が理解して、異文化社会の中で実践するのは並大抵のことではない。その上、日本社会でのイスラームに対するイメージは決して良いものではない。しかしながら、それでも過去から現代に至るまでイスラームに改宗する日本人は存在した。これほどまでに日本人に馴染みのない、明確な宗教教義を持つイスラームについて、彼らはどのようにイスラームを知って理解し、受容していったのだろうか。

3．日本におけるイスラームの歴史：日本人改宗者のイスラーム理解と受容の歴史

一般の日本人とイスラームとの邂逅の歴史は古く、明治期までさかのぼることが出来る。文献上で確認できる限り、 明治期以前は、 外交上でのムスリムとの出会いがあったにすぎなかった。それは、日本におけるイスラームの歴史に一石を投じるほどではなかった。一般の日本人とイスラームが出会ったのは、1890 年オスマン帝国の軍艦エルトゥールル号が現在の和歌山県串本町沖で台風に遭遇し、遭難沈没した事件の時である。翌年、事故の生存者は日本の軍艦 2 隻で送り届けられた。その時に同乗した若い日本人新聞記者が、トルコ滞在中にイスラームに改宗した。男性の名は野田正太郎という。彼が現在文献史料で確認できる最初の日本人ムスリムである。

3．1．戦前から 1980 年代前半までの日本のイスラームについて

日本におけるイスラームの歴史において 1890 年から終戦までは、 非ムスリムの日本人によってイスラームが広められていった時期であった。その理由は、 当時の日本政府が中国西北部と、のちに東南アジアにおいて行われた植民地政策、 いわゆる回教政策を推進していたからである。この政策に従事する日本人たちの中にはイスラームに改宗した者もいた。しかしながら、それはビジネスとしての改宗であった。そのため、終戦以降までムスリムとして生きることを選択した

日本人はごくわずかであった。

戦前・戦中は回教政策を促進するために、非ムスリムである日本人がイスラームを擁護していた。だが終戦以降は、日本人ムスリム自らの力で日本にイスラームを広める活動をしなければならなくなった。日本人ムスリムはイスラームについてまだ知らないことが多かった。そこで、当時留学やビジネスなどで滞日していた外国人ムスリムと協働で、日本におけるイスラームの基礎が作られるようになったのである。

このころから、日本人ムスリムも少しずつではあるが増加した。その理由は、中東における石油ビジネスに従事する人々が増えたこと、あるいはまた中東や東南アジアなどのイスラーム諸国に留学する者が出てきたことによる。

一方、1970 年代後半から 1980 年代にかけて、日本におけるイスラームの歴史の中で、特異なイスラーム団体である「日本イスラム教団[2)]」が現れた。この団体は 1 か月半という短期間のうちに、約千人もの日本人をイスラームに改宗させた。

3. 2. 1980 年代後半からの日本のムスリム社会について

日本のイスラームは 1980 年代後半から変化していくこととなる。この時期に、 日本は好景気に沸き豊かさを求めて来日する外国人が急増した。イスラーム諸国からも多くのムスリムが日本にやってきた。彼らの出身国は、主にイラン、パキスタン、バングラデシュであった。当時これらの国々は、日本へのビザなし渡航が可能であったからだった。

労働力として来日した外国人ムスリムたちは、長期に亘って滞日した。こうした滞日ムスリムの増加は多くの日本人にイスラームを知る機会をもたらすことにもなった。また彼らの多くは男性であった。彼らと日本人女性が出会い結婚することで、日本国内で家族を形成するようになった。同時に、配偶者である日本人の多くがイスラームに改宗し、日本人ムスリム数の増加が見られた[3)]。

3. 3. 現代社会にみられる日本のイスラーム

1980 年代後半から 1990 年代にかけて、外国人ムスリムとの結婚によるイスラームへの改宗で日本人ムスリムの数が増加していった。やがて日本国内にムスリム第 2 世代が誕生することになる。この時期に日本各地に多くのモスクやムサッラー（簡便な礼拝所）が建設されるようになる。2014 年現在までに、日本全国に約 60 カ所にものぼる礼拝施設が建設されている。また、イスラームでは土葬による埋葬が決まっているので、イスラーム霊園も整備されている。2014 年現在、山梨県甲州市塩山にあるイスラーム霊園を筆頭に、北海道など全国に数か所存在する。こうして日本国内に少しずつではあるが、イスラーム的な環境が整備されることになった。

だが、イスラーム的な環境の整備は、同時に地域社会との軋轢を生むことにもつながる。保坂（2004）は、日本社会にとってイスラームはなじみが薄く、隔たりが大きい故に「もめごと」を生じやすいと述べている（保坂、2004：119–121）。また梶田（1994）は、仮に多数のムスリム

が日本に定住し、日常生活のなかでイスラームの教義を実践したとしても、西欧諸国にみられるような明確な宗教対立が起こることはおそらくないと指摘したうえで、日本人側からの反発が生じるとしても、それは宗教的感情からというよりは、むしろ「異質な」習慣、「奇妙な」行動に対していだく「迷惑」という形で顕現することになろうと述べている（梶田、1994：107）。

いくつか事例を見てみよう。日本ムスリム協会によって現在の山梨県甲州市塩山に、10, 800 平方メートル（2, 700 坪）のイスラーム霊園が整備されている。地元にある「文殊院」という寺院の当時の住職が、日本のムスリムたちがムスリム用墓地の不足に困っていることを知って寺の土地を提供した。だが、日本で由緒あるこのイスラーム霊園も、現在ではこれ以上の土地の拡張が困難な状況にある。その原因の 1 つは土葬に対する否定的なイメージにある[4)]。

モスクの建設についても地域住民との問題が生じたことがある。例えば、福岡マスジドではモスクの建設に伴い、騒音や駐車違反等の問題で地域住民とのトラブルを抱えないように積極的な対話を重ねて理解を求めた。その結果、地域社会との協力関係を築いている[5)]。

また石川県金沢市のある地域ではモスク建設計画が持ち上がっていた。しかしながら、騒音や違法駐車への心配やイスラームという異文化に対する不安や警戒感から住民が建設に反対していた[6)]。だがその後半年以上の地域住民との話し合いを経て、2012 年にモスク建設着工に至った[7)]。

以上の事例のように、イスラームはいまだ日本人に知られていない宗教であるといえる。イスラームを知らないが故に、何かイスラームを象徴するものが建設されるということになると、その不安や警戒感から地域との問題が生じるのである。ムスリムと地域住民との相互の共存関係は、双方がお互いのことを知ることから始まる。ムスリム用墓地、そしてモスク建設の問題も、ムスリムが日本社会の中でいかに地域に理解を求めていくことができるのかという共通の課題を常に抱えていることを示唆していよう。

その他にも、日本人ムスリムたちが直面している問題もある。日本社会の中で、日本人女性ムスリムにとって最も勇気がいるのはスカーフを着用することであるという[8)]。またスカーフ着用のまま就職活動をしたが、15 社ほどに断られた日本人女性ムスリムもいたという[9)]。

さらに、日本におけるイスラーム教育に関する問題も述べておきたい。学校教育の場でムスリムが周囲の非ムスリムの人々にイスラームを理解してもらうためには、宗教というよりも多文化理解の視点から説明したほうが容易である。

都内の、あるモスクで行われていた「ムスリマ（女性ムスリム）の集い」に筆者が参加していた時のことである。ある一人の日本人女性ムスリムが、学校教育現場におけるイスラーム理解のレベルが低いことに対して「先生たちにも宗教としてのイスラームをわかってもらいたい」と発言していた。なぜ彼女はわざわざ「宗教としてのイスラーム」を理解して欲しいと述べたのだろうか。実は日本の教育現場でよく見られる状況がその背景にある。非ムスリムの日本人たちは、特に学校教育の場で「異文化」としてイスラームの教義の実践を認める傾向がみられる。つまり、イスラームを「宗教として」ではなく、「異文化理解」あるいは「文化交流」の枠組みの中で捉えようとしているのである。文化習慣の相違として非ムスリムの生徒たちにイスラームを教えるこ

とによって、ムスリムの生徒が問題なく校内で礼拝し、給食ではなく弁当を持参することができるようになる。近年、アレルギーなどの健康上の理由から摂取できない飲食物について、学校側が生徒に対してかなり気を配っている。そんなことも相まって、学校関係者は同じクラスの生徒たちと異なっても生徒や保護者の要求を認めているのである。ただ、これは学校関係者の寛容の度合いによるところでもある。健康上の理由でもなく、イスラームという宗教の教義に基づいてできない事柄を十分に説明しても、非ムスリムに理解してもらうことは容易ではない。生徒の片親が外国人であれば、異文化を持った家庭であることに視点をずらしてイスラーム理解を求めることもできる。しかし、両親ともに日本人同士の場合、「異文化」であることを理由としてイスラーム理解を求めるのは困難である。

また一見すると、そこでは非ムスリムの日本人たちの配慮が効果を上げているようにも思え、何の問題もないかのように映るかもしれない。しかし、こうした日本人たちの「理解」は、「宗教性、精神性に対する認識の差（保坂、2006：60）」がある点にも考慮しなければならない。その点からすると、日本人たちによるイスラーム理解は、極めて表面的、かつ限定的・断片的なものであることも指摘できよう。

アメリカの統計調査機関によれば、日本のムスリム人口は2010年現在18万5,000人（人口比：0.1%）である[10)]。そのうち、約1万人が日本人ムスリムであるといわれている。いわば、「マイノリティ中のマイノリティ」といえる存在である。

彼ら日本人ムスリムは、イスラームの教義を忠実に守ろうとする傾向がある。とりわけ若年層を中心にして日本人ムスリムたちは、厳格にイスラームの教義を守ることに固執する。外国人ムスリムがするように、髪の毛を少しも出すことなくスカーフを着用し、日本国内においても常にイスラーム諸国で愛用されている民族衣装を着用する人も存在するのである。

日本社会にいることは、日本文化を受容することも意味する。だが、ムスリムであることはイスラームも受容することを意味する。そもそも日本文化にイスラームとの共通性を見出すことが難しいから、先述したように日本社会の中でイスラーム的な環境を整備するよう努力するわけである。たとえムスリムが日本社会で生まれ育ったとしても、イスラームの教義を厳格に守ろうとすると、日本社会は彼らにとって異文化そのものに転化してしまう。

では、イスラームは全く日本文化に合わないのだろうか。日本社会では全くの異質な宗教としての扱いなのだろうか。実は、過去にイスラームを日本文化に適合させようとした試みがあった。それが「日本的イスラーム」の試みであった。

4.「日本的イスラーム」の試み

「日本的イスラーム」とは何であろうか。それは、日本人にわかりやすくイスラームを説き、日本人が簡単にイスラームを実践するようにした試みであった。またそれは、日本人の宗教性とイスラームを融合した試みであったともいえよう。それは戦前から見られた。戦前の日本人改宗者

たち、とりわけ有賀文八郎による「日本的イスラーム」の試みであり、1980 年代にみられた「大乗イスラーム」という思想であった。

4. 1. 戦前の日本人ムスリムによるイスラーム理解

戦前の日本人ムスリムのイスラーム理解としていくつか例を挙げたいと思う。山岡光太郎は、日本人で初めてメッカ巡礼をした人物である。日露戦争時にロシア語通訳官として従軍した。その後、日本軍幹部からメッカに行くよう指示された。その時は非ムスリムであったが、途中滞在したインドのムンバイで非ムスリムがメッカに入ることが他のムスリムたちに知れ渡り、急きょイスラームに改宗することになった。ムスリムになるということは、イスラームがどういう宗教であるのかを知り六信五行を理解しているということを示す。だが、山岡は「アッラーは偉大なり」という意味の、「アッラーフ・アクバル」という言葉を「天照大御神（あまてらすおおみかみ）」と解釈していた。つまり、神道の神と同一視していたことを示している。

次に、もう一人の戦前の日本人改宗者、有賀文八郎という人物による布教活動を紹介する。彼は貿易商を営む中でイスラームと出会い、インドのムンバイで改宗した。戦前、日本国内でイスラームの布教活動をした。その中には著述活動もあった。その著述の一つ「日本イスラム教信仰個條」の中にみられる、「日本イスラム教の道徳」の記述を紹介する。

「日本イスラム教の道徳（有賀、1939：38–39）」に関する項目（一部抜粋）

一　我々は唯一神即ち天の御中主の大神を本尊として崇拜す。而して教祖ムハメツド師を敬愛す。
一　我々は天皇皇后両陛下並びに皇族御一同を奉敬す。
一　我々は父母を敬愛す。
一　我々は兄弟姉妹を相愛す。
一　我々は夫婦相愛す。
一　我々信徒は兄弟姉妹の如く相愛す。
一　我々は己れの屬する國を愛護し、其爲めには死力を盡して奮闘する。
一　結婚式にはイスラム教師の立會を求む。
一　葬儀にはイスラム教師を司宰とす。
一　子女は父母に孝養を盡すべし。
一　親は子女を愛育すべし。
一　酒は飲まざるを良しとす。但し健康に害なく、狂態に陥らざる者は恕すべし。
一　喫煙を禁ずるを良しとす。但し健康に害なき者は此限りにあらず。
一　豚肉を喰はざるを良しとす。但し他に適當なる副食物を得ざる時は此限りにあらず。
一　金曜日の禮拜式には必ず教院へ参集すべき事。

項目の最初に、「唯一神（アッラー）」は「天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）」であると記している。また、 両親や家族への敬愛は当時の道徳として当たり前のことであった。一方で、イスラームの教義において日本の習慣にない項目には理解を示すためか、本来はあり得ない但し書きを付けている。

この有賀文八郎の著述から何を読み解くことができるだろうか。当時は日本人ムスリムであっても、イスラームを理解することは容易ではなかったといえよう。それは当時の社会背景として「国家神道」と関連付けねばならない事情もあっただけでなく、一神教の概念は多くの日本人にとってわかりにくいこともあったためであろう。イスラームを理解するには、これまでの自分の身近な宗教との対比において理解するのが近道である。それが神道だったのだろう。

4. 2. 1980 年代初期にみられた「大乗イスラーム」の思想

一方、終戦以降にも「日本的イスラーム」の試みがみられた。それが「大乗イスラーム」という思想である。「大乗イスラーム」は、日本イスラム教団の専務理事であった安倍治夫が述べていた思想である。

安倍は自著『イスラム教』の中で、大乗イスラームの思想の特徴を、小乗的な特徴と対比して要約している（表 1 参照のこと）。安倍はまず大乗仏教と小乗仏教（上座部仏教）は「どちらが良いとは一概に言えずそれぞれに良い点がある」と前置きした上で、「歴史に照らして、小乗に堕ちた宗教の教派は委縮して普遍性を欠きやすい。これに反して大乗に進んだ教派は生き生きとして流動性に富むとされる」と述べている。さらに安倍は続けて「イスラームそのものには、大乗も小乗もない、ただ一つの正しい道があるだけである。しかし、これを信奉するムスリム社会の教派のなかには、おのずと小乗的傾向が見出される」と述べている（安倍、1986：148）。日本のムスリムたちが、イスラームの教義を重んじるあまり、形式にこだわりすぎることに安倍は懸念を抱いたのである。

宗教はこころ（精神）があってこそ、その言動に宗教性が伴うものである。教団における布教活動の中で、このような考えに至る場面に何度も遭遇したのではないかと推測できる。なお、安倍は親鸞の述べた「他力本願」の教えにも共鳴していた。安倍はこの教えの中にはイスラームに

表 1　安倍治夫による大乗・小乗の特徴

	大乗	小乗
実質性	形式よりも実質（精神）を重んじ、戒律の末節にとらわれない。	実質（精神）よりも形式を重んじ戒律や礼拝などに固執する。
思索性	思索によって道を極めようとする。	日常的実践によって正邪をわける。
普遍性	個より一般を重んじ習俗にとらわれない。	一般化を好まず習俗にとらわれる。
流動性	固定を好まない。	古いものにとらわれる。
宗派性	宗派にとらわれない。	宗派の別にとらわれる。
性差性	性差別にとらわれず女性を対等にあつかう。	性を危険視し、女性を低いものと見る。

出典：安倍治夫　1986『イスラム教』現代書館　149 頁より。

通じるものがあると考えていたようである。

では、 結果として大乗イスラームの思想は何を表しているのだろうか。他の宗教だけでなく、イスラームにおいてもまた精神を重視する。イスラームの精神があれば、それはおのずと信徒たちの言動にも現われてくる。だがイスラームの教義の実践にこだわりすぎると、ムスリムたちの言動は、異文化社会である日本社会の状況に見合わずに、日本社会から逸脱してしまうことになる。一方で、イスラームは永久不変の宗教である。形式にこだわりすぎているとして、精神を重んじるのみで教義を実践しなければ、そこで勝手にイスラームの教義を解釈してしまうことになる。故に、大乗イスラームの思想は、もはやイスラームという宗教ではなくなる。小室（2002）もまた同様に、大乗イスラームについて考察しており、この思想はもはやイスラームではないと述べている（小室、2002：134–137）。

イスラームは一神教であり、他の神は認めない。唯一神アッラーのみが神として「畏怖する存在」である。神はイスラームでは偶像で表すことはできない。また、教義によって信徒の日常生活や社会規範が明確に定められている。イスラームの教義を少しでも曲げることはイスラームではなくなる。それ故、「日本的なもの」にイスラームを解釈する「日本的イスラーム」は多くの日本人ムスリムたちの支持をえることなく、試みだけに終わった。

5．日本人の宗教性について

次に、イスラームの視座から日本人の宗教性について考えていきたい。はじめに現代日本の宗教文化の状況とその特徴について述べる。多くの日本人は自分が宗教とは無関係であると思っている。しかし同時に、統計によれば、日本人は必ず何らかの宗教団体に帰属していることも事実である。

5．1．現代日本の宗教文化

表 2 は、文化庁文化部宗務課による宗教統計調査（平成 25 年度）「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」の表である。日本の総人口は、平成 26 年 5 月 1 日現在 1 億 2 千 710 万人であるが、信者数の総数は 1 億 9 千万人と記されている。つまり、日本人は必ず何かの宗教団体に入っ

表 2　全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数（系統別）

項　目	宗教団体（宗教法人を含む）						宗教法人						教師（うち外国人）			信　者
	神社	寺院	教会	布教所	その他	計	神社	寺院	教会	布教所	その他	計	男　（外国人）	女　（外国人）	計　（外国人計）	
総数／系統	81,377	77,402	32,078	22,139	7,193	220,189	81,207	75,962	23,111	247	1,276	181,803	325,568（2,786）	340,327（1,271）	665,895（4,057）	197,100,835
神　道　系	81,273	16	5,502	1,061	868	88,720	81,121	10	3,635	103	218	85,087	52,319（　46）	32,694（　92）	85,013（　138）	100,939,613
仏　教　系	31	77,342	2,207	1,956	3,702	85,238	24	75,911	993	82	390	77,400	165,763（　432）	173,132（　391）	338,895（　823）	85,138,694
キリスト教系	—	2	7,212	895	1,168	9,277	—	—	4,171	19	369	4,559	24,923（2,168）	4,305（　660）	29,228（2,828）	1,908,479
諸　　教	73	42	17,157	18,227	1,455	36,954	62	41	14,312	43	299	14,757	82,563（　140）	130,196（　128）	212,759（　268）	9,114,049

（注）教師中（　）は、外国人教師・宣教師で全教師数の内数である。
総務省統計局「宗教統計調査　平成 25 年度」より（平成 24 年 12 月 31 日現在）。

ているうえに、一人が複数の宗教を信じていることになる。

だが実際に自分が何の宗教あるいはどの宗派に帰属しているのか、すぐにわかる日本人がどれほどいるだろうか。常に家族の誰かが教会や寺院に通い、あるいは自宅で祈っている姿を見ていれば、自然と自分もまたその宗教に入っていることがわかるだろう。しかしながら、多くの日本人が自分の家族の宗教を知るのは、だいたいにおいて家族や親族の葬式の時である。それほど多くの日本人が宗教について関心を持っていないといえるだろう。

しかし一方で、日本人は宗教と大いに関係していることがいえる。末木（2006）は、習俗化した行為まで含めれば、多くの日本人は何らかの形で宗教と関係しており、厳格な意味での無神論とか無宗教の人は極めて限られていると述べている（末木、2006：227）。確かに、どんなに無宗教であることを標榜していても、完全な無宗教である日本人はほとんどいないだろう。というのも、多くの日本人は正月の初詣に近くの神社・仏閣に行き、お盆に先祖のお墓参りをするかと思うと、クリスマスも祝う。しかし本人はこれらが宗教的行為であることを自覚していない。この点が日本人の宗教性を示しているともいえよう。

イスラームに話を戻すと、ムスリムたちは日常生活においてイスラームの教義を実践する。ということは、ムスリムとしての自覚が常にあるということを示唆している。またイスラームは一つだとムスリムたちは常に述べる。たとえ地域的な違いがあったしても、六信五行を基本原則とした永久不変の宗教だからだ。それ故、先述した通り、イスラームを改変してしまった「日本的イスラーム」は、多くのムスリムから受け入れられることはなかったし、今後も受け入れられることはないであろう。

神道は明確な教義がなく、また自然物や歴史上の人物が神になるように、社会状況に応じて変化しやすい宗教であるといわれている。また、外来の宗教であった仏教は、日本独自の仏教に発展を遂げたことがいわれている。戦国時代に日本に入ってきたキリスト教も外来の宗教であるが、仏教と同様に日本社会に見合うように変化していった。

かつての仏教やキリスト教がそうであったように、外来の宗教はその時の社会状況に応じて変化することによってその地域の人々の間で広まって受容されていった。それは、いわば宗教の「土着化」の過程でもある。「土着化」することこそ、外来の宗教が日本人に受け入れられる一要因となる。従って、これまで日本に伝わってきた仏教にせよ、キリスト教にせよ、日本社会に広まっていく中で、当時の社会状況と時代性を受けて変化し、「土着化」していったのである。

日本のイスラームにおいて、過去に「日本的イスラーム」の試みがみられた。これは、日本社会に「土着化」させることで多くの日本人に「イスラーム」をもたらすきっかけをつくろうとした試みであった。こうした試みはイスラームに限られているわけではない。一般に日本人は宗教の教義をその時の状況に応じて変えることができる。というのも、現代日本の宗教文化は、もともと宗教性のない事柄をあたかも宗教と関係があるかのように変化させ発展させることができるからである。その現象のいくつかを以下に例示しよう。

5. 2. 現代日本の宗教文化：宗教と漫画、アニメ、萌えキャラ、パワースポット

近年、日本人がこれまで培ってきた伝統宗教を変えているといえるような現象がよくみられる。漫画やアニメと、宗教との関連性（正木、2010：68–73）（呉、2009：228–233）や、実は宗教的行為と捉えることのできる行為（パワースポット巡り等）が見られる。

宗教と漫画・アニメといえば、埼玉県にある鷲宮神社がその代表格である。というのも、この神社は漫画「らきすた」の舞台となった。この漫画は「オタク」と呼ばれる、ある特定の人たちに人気があるため、「聖地巡礼」と称して、多くのファンが神社に参拝するようになった。毎年秋に行われる鷲宮神社の大祭には、通常の神輿だけでなく、漫画のキャラクターを描いた「らきすた神輿」が街を練り歩くという。この「らきすた神輿」を担ぐのは、地元住民ではなくこの漫画のキャラクターが好きな人々である。神輿はもともと神を乗せて担いで町一帯を練り歩くものである。ということは、彼らにとってキャラクターは神同然なのである。

また萌えキャラで有名になったのは、了法寺（東京都・八王子市）というお寺である。このお寺では弁才天を祀っているのだが、多くの人にもっと寺院に興味を持ってほしいという理由から住職が弁才天を萌えキャラにした。これをきっかけとして、鷲宮神社同様に、いわゆる「オタク」と呼ばれる人たちが「聖地巡礼」と称して了法寺に参拝するようになった。了法寺のお守りは萌えキャラが刺しゅうされており、きちんと弁才天に祈祷をあげたお守りである。なお、萌えキャラに限らず、一部の神社では祀ってある神とは全く関係ないにもかかわらず、ハローキティやリラックマといったキャラクターのお守りやおみくじを扱っている神社もある。このような萌えキャラ等による参拝客の増加は、宗教を利用したビジネスであり、町おこしにも一役買っている。

また以上の事例は、いわゆる漫画やアニメ、萌えキャラのファン等ある特定の人々に関する事例である。だが、さらに多くの日本人による宗教的行為がある。それがパワースポット巡りである。自分の願いを叶えるため、あるいは癒しを求めるために、パワースポットを巡ることが流行っている。パワースポットへの行脚もまた近年よくみられる日本人の宗教性を伴った行為である。2013 年 10 月には伊勢神宮の第 62 回遷宮が行われた。20 年に一度の行事ともあって、伊勢神宮はこれまでになく多くの参拝客で賑わった。また、 出雲大社は毎年 10 月頃に若い女性を中心にして多くの参拝者が訪れる。旧暦 10 月は通常「神無月」と呼ばれるが、 その名の由来はこの月に全国の八百万の神々が出雲大社に集結するためである。出雲大社が縁結びに効果があるという噂話も広まって、神々の集まる 10 月を狙って、多くの女性が出雲大社に参拝するのである。

都内でも有名なパワースポットはいくつかあるのだが、東京大神宮はその一つである。もともと伊勢神宮の遥拝殿として明治時代に建てられたものだが、 縁結びに効果があると評判になり、若い女性を中心に多くの参拝客で賑わっている。週末や休日になると、神社の外まで列を作って多くの人々が参拝に来ている。

このように、 日本の宗教は現代社会に合わせて宗教を変えることができてしまうといえよう。というのも、現代日本の宗教文化においては、もともと宗教性のない事柄をあたかも宗教と関係

があったかのようにしてしまうことができるからである。これもまた、日本人の宗教の特徴だといえるだろう。

5. 3. 考察：イスラームからみた日本のスピリチュアリティ

現代日本人の宗教性は、新宗教団体の存在や 5. 2. で取り上げたような疑似宗教現象も含めた、より複雑で分かりにくい宗教的行為によって示されていると思われる。そこで現代日本の宗教文化について、いくつか特徴をあげておく。

まず、萌えキャラ、あるいはパワースポットといったものに頼って参拝客の増加をはかっている神社仏閣が多いことである。それは宗教を利用したビジネスといえる。過去においては、新宗教団体が信者に様々な宗教団体のグッズを購入させたり、 あるいは自己啓発セミナーと称して、決して安くはない受講料を支払わせては、一段階上昇することを課して複数のセミナーを受講させているところもある。こうした新宗教団体の宗教ビジネスに似たような方法は伝統的宗教においても見られるのではないだろうか。鷲宮神社の場合、結果的にはその神社仏閣だけでなく、地域の町おこしにもつながった。このような方法は、漫画・アニメのキャラクターを利用して既存の宗教に興味を示さない若者に媚びているともとらえられよう。

神は神聖で多くの人に畏怖されるという視点からすると、このような現代社会にみられる宗教性は現代風にアレンジしたアピール方法であり、非常に世俗的なやり方である。それ故、「聖なるもの」「俗なるもの」の境界線が曖昧であるといえるのではないだろうか。また、神様を萌えキャラで表すことで確かに集客にはつながっているのだが、急増した参拝者は先祖代々からの信奉者ではないので、 一時的な流行でしかありえない。また純粋にその神を崇めている人からすれば、いくら集客を図るとはいえ、現代風にアレンジしたものに対して何の意味を持つのであろうか。

イスラームでは、偶像は禁止されている。萌えキャラを作成した寺院のように、神にまつわる新たなキャラクターを作って宗教グッズを作成・販売するという考えはない。いくら流行だからとはいえ、神を若者向けに親しみのこもったキャラクターにするという点は、これまでその宗教における神やお守りなどの「聖なるもの」と、常日頃触れることのできる漫画やアニメのキャラクターといった、宗教性を意図して作られていなかったものとの融合を示している。まさに「聖」と「俗」との境界線が曖昧だといえるだろう[11)]。

またパワースポットを訪ねることは、先祖代々から受け継がれる宗教でなくとも、自分の興味を引いた神社仏閣に行き、そこで自分の願いを叶えてもらうという現世利益を追求するという点で宗教的行為である。つまり、日本人の宗教性は曖昧模糊とした、定まっていないことが前提ではないだろうか。

以上を踏まえて日本人の宗教性の特徴をまとめると、次のようになるだろう。1. 無自覚であるが必ず宗教に関わっていること、2. 一人が複数の宗教を信じていること、3. 聖なるものと俗なるものが混在していること、4. 宗教に現世利益や癒しを求めること、の 4 点である。

1 について

イスラームでは日常において宗教を自覚することになる。一日 5 回の礼拝は義務である。モスクにいかなくとも清潔な場所であればどこでも礼拝ができる。また人間の日常生活だけでなく、人生を全てイスラームの教義で規定している。結婚式や葬儀もすべてイスラームの方式で行う。日本のように、家族の宗教は仏教だがキリスト教の教会で結婚式を挙げるということはない。

島田（2007）は明治に入って近代化されるまで、日本には「宗教」という概念がなく、無宗教という考え方についても同様に、自分は無宗教であるという自覚も生まれなかった点を述べている（島田、2007：22）。現代においても、多くの日本人が自らの帰属する宗教について無自覚である。日本では、「葬式仏教」という言葉があるくらい、その場になってみないと自分がどの宗教に帰属しているのかわからないことが多々ある。

2 について

信教の自由があるので、たとえ家族の宗教を知っていたとしても、個人で自分の帰属する宗教を取捨選択できる。それ故、家族の宗教と自分の選択した宗教を持つというように、一人が複数の宗教を持つことも、また無宗教であると公言することも可能である。戦前の日本人ムスリムたちは、神道の神々とイスラームの唯一神アッラーを同一視していた。それは、既知の神々と同一視しないと理解できないこともあったためであろう。

3 について

イスラームの教義においてあれだけ事細かく規定があるのは、イスラームが生まれた時の社会状況と時代背景にある。イスラームは砂漠の過酷な自然環境において、かつ部族間の闘争で社会が混沌としていた中から生まれたからである。これと対照的に日本は濃密な自然で満ち溢れている。この自然は豊かであるが、時折地震や洪水等の災害をもたらす。そうした変幻自在の自然への畏怖から自然物が神となったのではないだろうか。また「鎮守の森」に代表されるように、日本にはアニミズムの原点である自然、自然物信仰がある。ここから地域にそれぞれ特有の神が生まれ、人々に育まれていったのだろう。

日本の伝統的宗教の中でもこれまで示したように、漫画及びアニメと宗教が結び付いたり、あるいは若者を呼び込むために、若者受けするキャラクターを使用することが行われた。それを見た人々が「聖地巡礼」と称して参拝する。そのこと自体宗教に結びつく可能性はなく、どちらかといえば疑似宗教的行為あるいは現象として、日本人の宗教性の一部を成す、世俗的な傾向であることがいえる。

この点に関してウィルソン（1979）は、宗教の現代的変容を論ずるにあたって、2 点に問題を集約している。1 つは世俗化及び古い信仰の衰退という点、 2 つ目は、 新しいカルトの勃興という点である（ウィルソン、1979：131）。日本社会はオウム真理教がかかわる一連の事件を体験した。だがその結果、カルト的集団あるいは新宗教団体[12] のみならず、宗教それ自体への嫌悪感が

生まれた。宗教というイデオロギーの名のもとにおける活動への恐怖、さらには宗教に対するアレルギーが社会全般的に出ているといっても過言ではない。現在既存の宗教は、あまり信者数を増やしているとはいえない。イスラームも同様に、1980年代後半からみられたように結婚により改宗者が著しく増加したとはいえ、現在では微増しているに過ぎない。法務省がビザ配給に対する厳格な規定を設けた結果、1990年代以降労働力としての外国人ムスリムの来日は激減したからである。だが一方で外国人ムスリムと結婚してイスラームに改宗した日本人たちについてもまた、離婚によってイスラームから離れていくことになった者が存在することを指摘せねばならない[13)]。なぜならば、そのような者はイスラームを自分の宗教として心から認めることができずにいたからである。

だが、人々は何かにすがりたいという気持ちはある。パワースポット巡りのような、特定の宗教や宗教団体に帰属はしないが現世利益を追求することのできる宗教的行為は、 まさに「緩い」感じの宗教といえ、多くの日本人に受けいれられている理由といえるだろう。

4について

イスラームでは日々の義務の礼拝において現世利益は求めない。来世で天国にいくために、現世での徳を積むのである。また現世で苦しい時間を過ごすのは、それは本人が克服する力を神が与えているからと考える。もちろん、イスラームにも「ドゥアー」という本人の願いを込めた祈りがある。自由に行う祈りであり、神をたたえる義務の礼拝（「サラー」）とは違う。また中東では「ドゥアー」は神に対してだけでなく、聖者の墓に対しても行っているのを目にすることがある。「ドゥアー」は義務ではないのでやらなくてもよい。ここで注意しなければならないのは、「サラー」と「ドゥアー」は切り離して考えなければならないことである。同じ神に対して祈るのだが、その目的が異なるからである。

この点において、日本人の現世利益の願掛けはイスラームとは異なる。日本では現世利益を求める。日課として決まった神社や寺院に行って祈る日本人がどれほどいるだろうか。「苦しい時の神頼み」という言葉が示す通り、多くの日本人が何か願い事があったり、当の本人に問題がふりかかってくると神に頼む傾向がみられる。しかも、先祖代々信奉している決まった神社や寺院でなく、テレビや雑誌の記事で取り上げられた神社・仏閣へ行って、願をかけるのである。これが日本人の宗教性の特徴といえるだろう。

最後に述べておきたいことは、日本人が曖昧模糊とした宗教性を持つのは、イスラームとは違い、日本では宗教による明確な規範を作って人間社会を統括しなくとも、既にそれにとって代わる道徳性や倫理性が日本社会に存在するという事実である。

近年では日本人の道徳性や倫理性の喪失がいわれて久しい。だがそれでも、海外と比べると日本人は行動が自己規制的であり、もともと倫理的行動規範が浸透して穏やかであるといわれている。例えば、海外で震災がおきれば必ず暴動・強奪騒ぎがおきるといわれている。だが、東日本

大震災の時それがおきなかった。物資の配給の時も多くの被災者が長い列を作って静かに待っていた。そのことに対して海外から称賛の声が上がったのである。

もちろん日本人の行動が穏やかなのは、これまで先祖代々培われてきた倫理性のおかげであろう。これまで培われた倫理性が、宗教的教義・規範にあえて頼らなくとも、自然と行動に出ている。この日本人独得の倫理性は、おそらく日常生活の実践の中から生まれた。言い換えればそれは、人間がともに社会活動し、ともに幸せに生きていくにあたって必要な民衆の知恵であったともいえよう。

一般的に現代日本人の道徳性や倫理性はすでに失われたといわれている。だが以上のことを考えさせるきっかけは、イスラームと日本人の道徳性の類似点にあった。日本のムスリムたちがイスラーム的な環境を整備するよう努力するのは、日本文化にイスラームとの共通性を見出すことが難しいからであると先述した。しかし、日本人の道徳性についての外国人ムスリムたちの意見には興味深い点がある。彼らの指摘によれば、イスラームと日本の文化は相通じるところがあるという。どこがどう通じるところがあるのか筆者には不明なのだが、 彼らの意見を集約すると、宗教による規範を作らなくとも、日本社会では道徳性や倫理性がすでに存在しているという。実際に以下のように、長期間滞日している外国人ムスリムたちは述べている。

> ニッポンジンは親切で、勤勉だ。アメリカ人も同じだが肌合いが違う。そこが僕にはピッタリくるのだ。というのも、 イスラーム教の道徳とニッポンのそれとは、 驚くほど、相通じているところがあるからだ。　（ライース、1987：2）

またイスラミックセンター・ジャパンの会長でもある、サリー・M・サマライは、彼の小論「日本におけるイスラームの布教の歴史と発展」の中で、「イスラームは日本人の思考様式に合っており、日本人には受け入れられ易い（サマライ、2002：19）」と述べている。すなわち、外国人ムスリムたちは、日本人はイスラームに改宗していなくとも、イスラーム的な生活をしているといっているのである。

彼らの発言からも、日常の明確な宗教行動がなくとも、また宗教における帰属意識がなくとも、日本人は無意識のうちに宗教性を持ち宗教的な行動を起こしているといえるだろう。また、それが日本人の宗教性なのであろう。

注

1）イスラームの基本原則を変えた為に迫害を受けている教団がある。19 世紀末に北インドで発祥したアフマディーヤ教団である。イスラームでは、預言者ムハンマド以降に預言者は現れないという基本原則があるが、この教団の創始者ミルザー・グラーム・アフマドが自ら預言者であることを主張した。そのために教団の信徒たちは迫害を受けてきた。現在でもパキスタンや

インドネシアのアフマディーヤ教団のモスクが焼かれるなどの事件が起きている。

2）日本イスラム教団は、 二木（ふたき）秀雄という日本人医師によって創設された団体である。彼は 1974 年 12 月にイスラームに改宗し、 翌年から新宿・歌舞伎町にあった診療所を拠点に、イスラームの布教活動を行った。教団は 2000 年に登記を閉鎖している。

3）イスラームでは多神教徒との結婚は認められない。そのため、多神教徒がイスラームに改宗することになる。大半の日本人女性たちは神道や仏教などの多神教徒であったので、一神教であるイスラームに改宗したのである。

4）『読売新聞山梨版』2010 年 8 月 15 日、p.25。

5）『毎日新聞福岡版』2008 年 6 月 26 日、p.23。

6）『読売新聞石川版』2011 年 10 月 4 日、p.31。

7）『読売新聞石川版』2012 年 5 月 5 日、 p.21。なお、 工事は 2014 年に完了し、 同年 8 月 17 日に開堂式が行われた。モスクの外観も町並みに合うようにアパートの形に建設され、住民のイスラーム理解が深まったことが記事に記されている（『読売新聞石川版』2014 年 8 月 17 日、p.29）。

8）『毎日新聞大阪夕刊』1999 年 1 月 21 日、p.1。

9）『朝日新聞』2002 年 2 月 1 日、p.1。

10）Pew Research Center の統計結果による。ただし、 店田（2013）によれば、 11 万人程度と推定している。筆者もこの数字に同意する。

11）これまで多くの宗教学者が「聖なるもの」の定義を行ってきた。（立川、 2006）は、「聖なるもの」は非日常的で不気味であり、かつ人を魅惑するものであって、それに対して敬虔さをもって接しなければならないものであり、宗教と呼ばれる現象はすべてそのような「聖なるもの」に関わっていると述べている（立川、2006：25–30）。

12）島田（2007）は、新宗教とカルトの境目は曖昧であると述べている（島田、2007：28）。

13）筆者の博士論文を参照のこと。

参考文献

安倍治夫（1986）『イスラム教』現代書館.

有賀文八郎（1939）「日本の一回教徒として」『イスラム』6、pp.34–39.

ウィルソン，B.（1979）『現代宗教の変容』（井門富二夫・中野毅 訳）ヨルダン社.［原著：Wilson, B.（1976）. *Contemporary transformations of religion.* Oxford: Oxford University Press］.

大村英昭（1996）『現代社会と宗教』岩波書店

梶田孝道（1994）『外国人労働者と日本』日本放送出版協会

呉智英（2009）「宗教テーマのマンガたち」渡邊直樹（編）『宗教と現代がわかる本 2009』平凡社 pp.228–233.

小村明子（2012）2011 年度博士論文『日本人ムスリム ── その生き方の歴史と未来への展望』上智大学

小室直樹（2002）『日本人のためのイスラム原論』集英社インターナショナル

サマライ， サリー・M　2002「日本におけるイスラーム普及の歴史と発展」『アッサラーム』86、pp.6–19.

島田裕己（2007）『日本の 10 大新宗教』幻冬舎

島田裕己（2009）『無宗教こそ日本人の宗教である』角川書店
末木文美士（2006）『日本宗教史』岩波書店
総務省統計局「宗教統計調査平成 25 年度」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001052797&cycode=0、2014 年 6 月 2 日閲覧）
立川武蔵（2006）『聖なるもの　俗なるもの ── ブッディスト・セオロジーⅠ』講談社
店田廣文（2013）「世界と日本のムスリム人口　2011 年」『人間科学研究』26（1）、pp.29–39.
保坂俊司（2004）『イスラム原理主義・テロリズムと日本の対応 ── 宗教音痴日本の迷走』北樹出版
保坂俊司（2006）『宗教の経済思想』光文社
正木晃（2010）「宮崎アニメが秘める宗教の本質」渡邊直樹（編）『宗教と現代がわかる本 2010』平凡社　pp.68–73.
ライース，ムハンマッド（1987）『外人広報室長のニッポン透視学』時事通信社
Pew Research Center（2011）. *The Future of the global Muslim population projections for 2010–2030*, Pew Research Center's Forum on Religion & Public Life.（http://www.npdata.be/Data/Godsdienst/PEW/FutureGlobalMuslimPopulation-WebPDF.pdf、2014 年 10 月 6 日閲覧）